

## 批評賞に関する批評的なもの

批評されることはあっても余り批評をしたことのない人生だった。

過去に様々なオーディションや選考会で審査員を務めた事はあるが、その行為自体が批評だったのかと言われると些か心もとない。そんな私がこの度、作家であり演出家でもある叶先生より「殺意」批評賞の審査員を拝命した。

批評文を選評する、と口で言うのは簡単であるが、他人様の作品、ましてやそれに対する批評文を批評せよとのことだから一筋縄ではいかぬ。しかし私の飯の種は戯作の再構築と普及である。戦後文壇における坂口安吾が代表とされる新戯作派、無頼派作家の一人である三好十郎の作品と聞けば引き受けずにはいられなかった。

選評対象である批評は総計5文お寄せいただいた。先ずもって、批評文を寄せて下さった方々への感謝を申し上げたい。今回の選評にあたっては私自身、非常に悩んだが自らの批評に対する不勉強は百も承知で選ばせて貰った。専門的で肯定的な内容は種田先生にお任せするとして、私なりの選評根拠を此処に示しておきたい。

先にあげた5文を読ませて貰い「原作」を読んでいるか否かで各々の批評が大きく印象を変えていたが、私の中では原作に抛らず上演作品に於いて言及している文を推させて頂いた。この作品は過去に様々な再演を繰り返し、第28回読売演劇大賞でも鈴木杏が殺意の演技で大賞、最優秀女優賞を獲得したのはご存じかもしれない。それだけに同名他作品との比較は仕方がないとしても、原作との比較をこの批評文内で記すレトリックは少し違和感を覚えた、いわんや74年前の作品、それはそれこれはこれ、なのである。また、選考に悩んだ要因の一つに、せりふ回しや芝居の根幹そのものに対する批評が多かったのも気になった。あの場所、あの音響、あの照明、あの演出、あの役者。だからこそ、あの作品が出来上がったのである。特に一人芝居は観劇環境や演出で大きく左右される、その中で本の持つ意味だとか現代との比較だとかに対する言及が皆さん多く、肝心の「あの芝居」に関しての評論が余り見えなかった。水平思考の提唱者エドワード・デボノは「何かを批評するものは批評対象より偉く見える」と言ったが、もう少しあの場に居合わせた観劇者としての一段低い視座があってもよかったのではないかと感じた。

その上で、批評賞に一文を選ばせて頂いた。幸いにも種田先生や演出の叶先生も同じ文を選出されていたので、一安心である。こう書いている今も内心は不安であるが、鑑賞批評そのものが主観的であるが故に、この選評もまた主観的批評である。批評文に対する批評文を書いたので、この批評文にもまた批評文が書かれるかもしれないと思うと夜しか眠れない。やはり批評をしない人生の方が楽かもしれぬ。